

ふたり紀行 日本とヨーロッパ

歴史の街と建築をめぐって

Trace the Historical Small City and its Architecture

土屋和男 (浜松支部)
(常葉学園大学造形学部)

塩見 寛 (官公庁支部)
(静岡県都市住宅部営繕企画室)

これから24ヶ月間、連載を担当させていただくことになりました。この連載では、歴史的環境を大切にしたい、元気のある、誇りをもった小さな街を紹介します。土屋がヨーロッパを、塩見が日本を担当し、交互に連載します。

人々が生活の営みを続け、生活の場を積み重ねてきたところには歴史があり、他の場所とは異なる街の個性があります。近年、日本でも歴史的環境を生かしたまちづくりが各地で展開されるようになりました。著名な都市だけでなく、広くは知られていない小さな街でも行われています。

環境問題や社会・経済的状況から見てもストックの活用は今後ますます重要な課題になります。また、地方自治への流れからも街の個性を見だし、活かすことが必要です。

歴史的環境を活かしたまちづくりと言え、なんといってもヨーロッパが先進地です。ヨーロッパではどんなに小さな都市でも歴史的環境をぬきに新しい展開を考えることは不可能です。そこでは何百年にもわたる時間の重なりを目にすることができます。

この連載では、日本とヨーロッパのそれぞれの歴史的環境に支えられた小さな街を照射して、歴史とは何か、街の個性とは何か、計画とは何か、を考える機会としたいと思います。

次のような街をとりあげる予定です。

- ・鞆の浦 (とものうら) (広島県) : 瀬戸際と埋め立て・架け橋
- ・飯沼 (いひぬま) (宮崎県) : 街路幅と町並み
- ・丹波篠山 (ひんなん) (兵庫県) : 市町村合併と街の個性
- ・五箇荘 (ごかしやう) (滋賀県) : 水の曲・水路の妙
- ・筑波大形・上菅間 (つくば) (茨城県) : 山岳都市と農村集落
- ・黒石 (くろいし) (青森県) : 火の見櫓
- ・城端 (じょうはな) (富山県) : 計画道路・古い建物新しい建物
- ・四間道 (しけみち) (名古屋) : 取り残された生活空間
- ・犬山 (いぬやま) (愛知県) : 都市計画道路の中止
- ・岩村 (いわむら) (岐阜県) : カステラのハイカラ
- ・甘楽 (かんら) (群馬県) : 土の匂い・こえたごの臭い
- ・小樽運河 (おほぞる) (北海道) : 20年前の反対闘争と現在の盛況

- ・スプリット (クロアチア) : 古代ローマの遺跡に住んでいる
- ・ドブロヴニク (クロアチア) : パラダイスとは
- ・ラヴェンナ (イタリア) : 初期キリスト教〜古代から中世へ
- ・ペルージャ (イタリア) : 通りと広場
- ・ウルビーノ (イタリア) : ルネサンス都市
- ・マントヴァ (イタリア) : マニエリスムの館
- ・オストゥーニ (イタリア) : 地中海の迷路
- ・レッツェ (イタリア) : 南イタリアのバロック
- ・ヴェズレー (フランス) : ロマネスクの巡礼教会
- ・アルケ・スナン (フランス) : 実現しなかった理想都市
- ・パース (イギリス) : 貴族たちの温泉
- ・ルガーノ (スイス) : アルプスの意味



南イタリア、レッツェの夕暮れ
街がいちばん賑わいを見せるとき

●まちのルールとしての歴史的遺産

2002年、静岡県教育委員会から「静岡県の近代和風建築」と題する報告書が刊行された。幕末、明治から昭和20年までに建てられた和風建築を調査したもので、1049件がリストに掲載され、そのうち83件に解説が付されている。県教委からは2000年にも「静岡県の近代化遺産」という報告書が刊行されており、こちらには538件がリストに載り、179件が解説されている。これらには抜け落ちているものもまだかなりあると思われるが、それでもあわせれば1500件を越す歴史的遺産が存在するのである。だが大きな問題は、それらが文化財としてリストアップされているにもかかわらず、多くが維持、保全の手が打たれていないばかりか、滅失へのベクトルが働いているように見えることである。

近年、不況下にもかかわらず海外旅行者数が急激に増大し、一般の人も欧米の景観を目にするようになった。そして、帰ってきてその差に愕然とする。言い古されたことだが、やはりこの国には、ことデザインに関してルールやコードといったものが欠如している。そんなものができるのか、という意見もある。こんなになってしまったものを直せるわけがない。各々が質を上げるしか方法はないと。たしかに納得する。しかし、それは大都市の、常に更新してゆくエネルギーとそのため的人的・経済的ポテンシャルが伴っての話である。

景観のコントロールは面的になさなければならぬ。ひとつの質の高い建築を保全しても、その周辺がコントロールされなければ景観は保全されない。逆にそれぞれは文化財的評価は高くない建物でも、面的なルールやコードが読み取れば、まとまった景観と感ぜられる。そして、このルールやコードを最も感じさせるのが歴史的遺産なのである。したがって、ルールやコードをつくるためには、面として歴史的遺産が保全されなければならない。これが歴史的環境である。せめて文化財と見なされる物件くらいは直ちに手が打たれるべきである。欧米から見れば静岡県で1500は少ないかもしれないが、それでも1500あればまだなんとかなるかもしれない。そもそもこのように生かされなければ、何のために県教委が調査しているのかわからないではないか。

●歴史を所有する価値

現行では、歴史的遺産の維持、保全となると、構造、防火などの建築法上の問題をはじめ、税制や資金融資上の問題などが障害となってくる。要するに

文化財を持つと損をするという状況で、私権が制限される割には、優遇措置が少なすぎる。景観に対する公共性の欠如と著しい対照である。景観を維持、保全しようとするとも資産価値が下がるというのはどう考えてもおかしい。欧米では通常、歴史的になるほど資産価値は上がり、転売を考えて維持、保全するくらいである。

景観と資産価値の良好な関係は、日本でもたとえば田園調布に見られた。ルールとコードによって単体を超えて集合的な景観を維持、保全してきたためにサラリーマンの新興住宅地は超高級住宅地になった。静岡県の景勝地といわれた土地で数十年来やられてきたことなどは、これとはまったく逆に見える。ついでながら、資産価値の上った田園調布は、税制によって土地の面積を維持することが困難になった。こちらでは農山村の民家周辺での景観の変化などを想起されたい。

歴史を所有する価値を役所、税務署、銀行に認めさせなくてはならない。

●地方の小さな街だからこそ

歴史的環境をつくる議論は、建築分野だけでは解決できず、遠い道のりのように感じられる。しかし、地方分権がうまくいけば状況は変わってくる可能性もある。税金、エネルギーの使い方、法律などを、地域の住民が自分たちのためであり、自分たちのコントロール下にあるという自覚を持てることが必要だ。つまり、自分たちの環境に関する資産と責任を感じられるようになるシステムが最も重要である。これは住民が自分たちで環境を選択し、作りだせるシステムと同義である。

歴史的遺産の維持、保全は、地方だからこそまだやれる施策である。放っておけばロードサイドのような画一化した、地方の意味すら失うような景観になってしまうだろう。そして、これは小さな街であればあるほどやりやすいし、客観的に見てその街の個性を発揮するには多くの場合それ以外にない方法である。

●いろいろ見る、たくさん歩く

歴史を所有する価値が認められるにはどうすればよいか。この答えは遠回りのようだが、建築士を含めて多くの住民がさまざまな歴史的環境を見て体験することにかかっていると思う。ときには誤解もあるだろうが、ほかの土地に憧れ、自分の土地を見直すことが、行政に働きかける力となる。建築士は訓練された目と足を持っている。この連載がみなさんが出かけるきっかけとなれば幸いである。